真理通信

第 84 号　平成 26 年（2014 年）3 月 1 日発行

巻頭

おのれをして先ず　なすべきところにつかしむべし
しかして後に他人（ひと）をかい誨（おし）うべし
心ある者はかくて　煩（わずら）うことなからん
（法句経　158）

◇新：法句経講義４２◇

＜※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。＞

「自分がまずなすべきことをして、そのうえで人を導きなさい」というこの教えは、誰もがグサリとくる教えです。人はとかく、自分ではしていないこと、出来ないことを人に要求するものです。その典型が、親の子どもに対する態度かもしれません。

「寝坊するな、夜ふかしするな」に始まって、「勉強しろ、口答えするな」どれをとっても、そう言う親の方がはたしてやっていること、やってきたことなのか、疑問になるものばかりです。親が夜ふかししていれば、子どもも自然と夜ふかしするようになるものです。反対に、親が勉強していれば、子どもも「そんなものか」と机に向かうものです。自分がしてもいないことを、人に要求するのは無理なことです。

社長さんが朝 1 番に出勤して、机の上でも拭いていたら、社員は誰も遅刻なんて出来なくなります。そこには、「～しろ」なんて指示さえ必要ないでしょう。社員は、社長がやっているようにやるようになるのです。

言うはやすく行なうは難いことですが、まさに人間行動の原理のようなことが、法句経には説かれ、語られているのです。

仏教豆知識　62	根気

根気（こんき）は、「あの人は根気強い人だ」とか「根気のいる仕事だ」とか、集中して取り組むことを言いますが、仏教では根機」と書いて、その人のさとりに達する能力・素質を表す言葉として使われます。また、根（こん）はその能力を起こす機能・器官として「眼・耳・鼻・舌・身」の五根、これに「意」を加えて六根が考えられました。登山で、「六根清浄」（ろっこんしょうじょう）と唱えるのは、それぞれの器官が執着を断って、清らかになることを表現しています。

＜　*主管所感*　＞

永遠につながる話　　友松浩志

今年も、元日の修正会（しゅしょうえ）からお寺の仕事が始まりました。午後 2 時、約 20 人程集まって下さって、神田寺の勤行式で勤行、仏教聖歌の合唱もしました。聖歌の合唱は、毎年参加して下さる日本ヨーガ学会の田原豊道先生の提案で再開したものです。2 曲合唱しましたが、ともに神田寺のオリジナル曲。その内の 1 曲「ささぐみあかし」は、全国の仏教寺院・団体で、宗派に関わらず歌われている有名曲です。（作曲：林　良夫先生）

この曲が作られたのは、昭和 23 年か 24 年頃だと思います。そもそも、神田寺が創建されたのが昭和 21 年のことです。戦後の焼け野原に、新しい仏教運動の拠点にしようと江東区にあった寺を移転して創られた寺です。戦後の荒廃した世の中に、新しい仏教聖典や仏教聖歌が送り出されました。当時、まだ子どもだった私には、そんな難しいことは分かりません。毎晩聞こえてくる、大人の人達の合唱の声を聴いていただけです。

昨年末に亡くなった紀野一義先生は、そんな時代に神田寺に出入りされていた方です。先生の「お別れの会」が、2 月の大雪の翌日、谷中の全生庵で行なわれました。雪解けの水滴が本堂の屋根から光のつぶのように落ちてくるなか、手元に配られた小冊子を開くと先生のこんな文章がありました。「知人の娘が有名な政治家のむすこと結婚した。代議士のスピーチにウンザリしていた私は、ズケズケ言った。＜寝る前に 5 分でいいから永遠につながる話をなさい。肉の値段がまた上がったなんて話じゃない。ひと月たっても忘れないような話ですよ。ここにいる人達は、とっくにやってないに決まってるが、あなた達は、始まったばかりだ。ちゃんとやって下さいよ＞　それから 1 年、あの若い夫婦はいまでも永遠につながる話をやっているだろうか。」

夜の闇に響く遠い歌声のように、永遠につながる話を、私も忘れないでちゃんとしていきたいと思いながら、谷中の坂道を下りました。

真理通信

第 85 号　平成 26 年（2014 年）7 月 1 日発行

巻頭

善きことを作(な)す者は　ここによろこび
かしこによろこび　ふたつながらによろこぶ
おのれの　きよらなる業(ふるまい)を見て
彼はたのしみ　彼はよろこぶ

（ 法句経 16 ）

◇新：法句経講義４３◇

＜※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。＞

「善いこと」を行ない「悪いこと」は行なわない、というのが仏教の最も基本となる教えです。「諸悪莫作・衆善奉行」(しょあくまくさ・しゅぜんぶぎょう)といい、ありとある悪をなさず、ありとある善きことは身をもって行なう － ことが、お釈迦様誕生以前から、多くの仏様が共通してお説きになってきた教えだと言われます。これは「七仏通戒伺」(しちぶつ つうかいげ)として広く知られたものですが、実はこの教えは、この法句経の 183 番に出てくるのです。

仏教の最も基本となる教えが、法句経にはたくさん出てきます。今回とりあげた「善いことをすると、その人のまわりは喜びに満ちあふれる」という教えも、仏教の基本となる教えです。ここで言う「ここ」というのは「現世」のことで、「かしこ」というのは「来世」のことですが、「善」がすべてに喜びを満たすという一貫した教えが、強く訴えられている部分です。

善とは何か、来世はあるのか、といった議論をする前に、まず善きことをしよう、実践しようという力強さが、法句経の教えにはあります。

仏教豆知識　63	衣帯（えたい）

古代の官職では、位によって衣や帯の色が定められていました。衣の色を見れば、その人がどんな位の人か分かったわけです。「得体が知れない」は、「衣帯が知れない」で、その人の位が分からない － という意味なのです。仏教僧は官職でしたから、位により衣の色が決められていました。これは現在でも引き継がれ、宗派によって異なりますが、衣の色を見れば、その僧の位が分かる－　得体が知れるようになっているのです。

＜　*主管所感*　＞

額（ひたい）の傷　　友松浩志

私の父の額には、大きな傷があった。への字の形をした傷で、晩年は皺と一緒になって大分薄くなったが、若い頃初めて会った人は、多分ギョッとする位大きな傷だった。父の若い頃というのは、戦争が終わったすぐの頃だから、戦場で出来た傷だろう、と思われたに違いない。でも、父は戦争には行っていない。結核で徴兵されず、東京にいた。その傷は、空襲で出来た傷だった。

東京の下町・深川にあった寺は、３月１０日の大空襲ですべて焼け、父たち家族は赤坂の知人宅に避難していた。そして、また空襲にあう。下町の空襲では無事だったが、今度はそういかず、父の眼の前で焼夷弾が作裂する。その時の様子を父は随筆に書いている。

＜皇居も焼失した夜の大空襲で焼夷弾にあたり、かぶっていた鉄かぶとが割れた。指で額をさぐると、傷口に三本の指が入った。私はとりあえず着替え用のシャツで傷口を押え、その頃になってようやく解放された秩父宮の邸内に入り、横になっていた。「もう、あれだめじゃないか」「頭をやられたら、しまいだよ」そんな囁きが近くで交わされているのが耳に入る。翌朝、家人に探し出されるまでは誰からも声をかけられなかった。その時、私はやはり一個の死体だったのかも知れない。＞

最近、在園児の祖父という方から、一通の手紙を頂いた。何気なく開いた手紙、そこに同封されていたコピーに、眼を奪われた。そこには、赤坂で死体同然になっていた父を、海軍部隊に運んで下さった方の回想記が書かれていた。父の命が救われた経緯を、改めて知ることが出来た。

父が亡くなって十三年。その額の傷も、遠い記憶になっていた。それが、一通の手紙によって呼びもどされた。隠しようもない大きな傷を、額の真ん中にもって生きた人生を、私は考えようともしなかった。もはや聞くことも出来ないそんな思い。そしてその傷が、今どんなに懐かしいことだろう。

真理通信

第 86 号　平成 26 年（2014 年）12 月 1 日発行

巻頭

出でしその胎（はら）により生れしその母によりて我は婆羅門と謂（よ）ばず　彼もし我有（わがもの）の思いあらば彼はただ「心の傲（おご）る者」といわるべし　我有（わがもの）と取着（むさぼり）の思いなき　かかる人をわれは婆羅門と謂（よ）ばん　（法句経　396）

◇新：法句経講義４４◇

＜※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。＞

「仏教」という宗教が 2000 年以上前にインドで成立した時、最も革新的だったのは、人をその生まれによって差別しないと宣言したところにあったと言われます。人を生まれた家や職業によって差別し階級づけることは、どんな社会でも行われてきましたが、インドではとりわけその制度が厳しく、カーストと言われるその制度は現在でもインド社会で大きな課題になっています。

そうした文化のなかで身分制度を否定し、人はその人の生き方によって価値が決まるのだと説くことは、本当に大きな勇気のいることだったと思います。現在の日本の社会においても、今だに身分差別は存在しています。特定の職業を見下したり、生まれた場所で人を決めつけることは本当に愚かなことです。

最近は、自由競争社会と言いながら、競争に負けた人を見下し、新たな格差や差別を生むような風潮があります。人は勝ち負けではなく、その生き方によって価値が決まるのです。傲（おご）り、貪（むさぼ）りを否定し、公平で執着心のない生き方を説いた仏教を、日本はもとより、東アジア全体の誇りとし、文化としていきたいものです。

仏教豆知識　64	上品

上品と書いて「じょうぼん」と読みます。一般には「じょうひん」と読み、人や物の質を言いますが、仏教では品を「ほん」と読んで、極楽に往生する人を九つに分けるのに使います。

上品、中品、下品の三品を、さらに上生、中生、下生の三に分け、合わせて九種、これを九品（くほん）と言います。上品上生（じょうぼん じょうしょう）が最高位で、下品下生（げぼん げしょう）が一番下の位です。九品仏というのは、九種類の阿弥陀仏のことです。

品には、もう一つ意味があって、経典の篇や章のことを「ほん」と言います。有名な「観音経」（かんのんぎょう）は法華経（ほけきょう）の一部で、正式には「法華経観世音菩薩普門品」と言います。

＜　*主管所感*　＞

私の記憶　　友松浩志

あー、時間がない。もう、みんな出かけて行ったのに、まだ自分の荷物はバックにさえ入っていない。荷物をバックに入れると、また入れる物が増えている。どうしよう。整理ができない。と、いつものように焦って・・・目が覚めた。夢だったんだ。

仕事に追われて、睡眠不足の毎日が続くと、夢もあまり見ないが、たまに見るとこんな夢、というのも情けない話しだ。そもそも「夢を見る」と言うけれど、夢は「見る」ものなのだろうか？　と疑問を持った人は多いと思う。夢を見ている時は、眠っているわけだから、目は閉じている。だから目では見ていないはずだ。それなら、いったいどこで「夢を見て」いるのか。

北浜邦夫氏の「ヒトはなぜ夢をみるのか」（文春新書）は、夢の疑問に答えた力作だ。当然、答は脳の中にある。夢は脳幹の一部で発生して、脳の中の視覚野で「見て」いるという。夢を見ている時の脳は、半分眠ったような状態（逆説睡眠）で、それは爬虫類や鳥でも確認されるのだという。夢は脳の中の「記憶のおしゃべり」で、しかも「記憶回路」から遮断されていて記憶できないのだという。

鎌倉時代に活躍した明恵（みょうえ）上人という高僧は、夜毎に見る夢を記録した。それは　「夢記」（ゆめのき）として伝えられ、近年、精神分析学者の河合隼雄氏の「明恵　夢を生きる」（京都松柏社）で広く知られるようになった。しかし、夢を精神分析の対象とするのは、最近あまり流行らない。それよりも、夢は「記憶」の所産なのだと思う。

人を人とするのは「記憶」である。両親の記憶、友人の記憶。様々な記憶が、「私」を作っている。確かに、いずれその記憶も歳とともに薄らいでいき、忘れていくだろう。その時見る夢は、乳児の見るような単純な夢なのかも知れない。

こんな詩がある。＜この道を　泣きつつ我の行きしこと　我が忘れなば　誰か知るらん＞

私の「記憶」、私の「思い出」、それは私にしか守ることはできない。